

未来は「チェンジ」から！ 特殊印刷の展開で新たな提案と商品の開発

全自動スクリーン印刷機導入
UV+スクリーン+箔押し+
抜き・溶着加工の一貫生産



大洞印刷(株)専務取締役
大洞広和

岐阜県本巣市にある大洞印刷(株) (大洞正和社長)は、1932年に活版印刷会社として創業。裏カーボン複写伝票を主に事業展開し、1999年にフォーム輪転6色機を導入。その後、CTPによるプリプレスのフルデジタル化を図り、UVオフセット印刷機の導入で特殊印刷事業を開始。そして昨年、全自動スクリーン印刷機「マエストロ80SD」(桜井グラフィックシステムズ製)を設備し、スクリーンによる新たな提案が模索され始めた。ハイデルベルグ菊半裁6色機、同7色機、フィルム印刷が可能なデジタル印刷機とともに、UV+スクリーン+箔押し+抜き加工・溶着加工など、自社で一貫生産体制を整え幅広いニーズに対応。常に時代の流れを読みイノベーションが続けられている。

今回、同社を訪ね特殊印刷部門を管掌する大洞広和専務に現状や今後の展開などについてお聞きした。

●チェンジのためのチャレンジ

本誌 創業時の活版印刷から量産体制のフォーム輪転機の導入とともに、コンピュータ用の帳票印刷の体制が強化され、それともう一つの柱となる特殊印刷への取り組みが始まった。そのあたりの経緯からお尋ねします。

大洞 祖父から聞いた話では、戦前から岐阜県南部の企業や印刷会社から伝票類の仕事を受けて印刷しており、『裏カーボンの大洞』として有名でした。そうした中、ロットの大きい物やコンピュータ用の帳票への対応のためフォーム輪転機を入れ、ビジネスフォームの生産体制の強化を図りました。1990年の頃でした。

しかし、今後の事業展開を考えた時、フォーム印刷に特化していても良いのかという疑問がありました。とはいえ、商業印刷に参入することは、今まで仕事をいただいていた印刷会社との競合になります。そうしたことを考えた末に導き出したのが、印刷会社のできないことを手助けする特殊印刷という分野でした。ですから、オフセットはUV印刷機ですし、デジタル印刷機もフィルム印刷が可能な機種です。現在は特殊印刷とフォーム印刷が2本柱となっており、特殊印刷が7割というところまで来ています。

本誌 現在の業務内容を！

大洞 ビジネスフォーム印刷、UV印刷を始め、印刷・通信販売、総合SPプロデュース (SPツールの企画・制作、マーケティングシステムの構築、空間プロデュース) など、さまざまなことを手掛けています。

本誌 いろいろな展開の中で、創業時のフォーム印刷ともう一つの柱と考えた特殊印刷が大きく育ってきているというわけですね。

大洞 そうです。私どもの経営理念は「チェンジ」

としています。これ自体は3年ほど前に決めたことですが、創業時から常にいろいろなことにチェンジをしてきており、いわば、チェンジのためのチャレンジです。UVオフセット印刷機を入れたときも、UVオフセット印刷の細かなところまで知っている者はいませんでしたし、箔押しも未経験から始めました。そして今回のスクリーン印刷もゼロからのスタートです。スクリーン印刷機を導入しないで協力会社に依頼する方法もありますが、これでは自社にノウハウを蓄積することができません。そうしますと、提案がありませんから受けるの仕事になり、チェンジすることはできません。ゼロから始めるのは、時間も、いろいろな費用もかかりますが、苦勞をして開発したことは自社の力になります。

本誌 今回のスクリーン印刷機導入もチャレンジの一環であったわけですね。

大洞 スクリーン印刷は、オフセット印刷とはまったく異なります。例えば、印刷機自体も原反、インキ、スクリーン版、スキージの圧、スキージの角度、乾燥など、オフセット機にはない多くの要素で成り立っております。導入から1年が経ちましたが、今でもいろいろなテストをしています。新しい仕事は全てテストから始めるようなものです。そのお陰で、現在は20種類以上のパターンとそれに派生するノウハウを蓄積できるまでになりました。

ゼロからスタートして、1年程で数百のノウハウを蓄積しました。

●新たな提案商品開発への第一歩

本誌 特殊印刷への挑戦で大きなターニングポイントとなったスクリーン印刷ですが、まず、パートナーとして選んだのがスクリーン印刷機メーカー桜井さんであった。

大洞 導入に関しては、桜井さんのスクリーン印刷機しか考えませんでした。同社にはスクリーン印刷の豊富な知識・ノウハウがあります。我々はゼロから始めるのですから、メーカーが持っている技術、ノウハウは非常に重要になります。また、桜井社長にも親身になって相談に乗っていただきました。そして、もう一つ有利なことは、桜井さんの岐阜工場が近くにあることで、アフターの分野でも決め手に



大洞印刷本社工場全景

になりました。

本誌 非常に大きな信頼の中で、今回、スクリーン印刷機「マエストロ80SD」が選択された。

大洞 マエストロ80SDは、単独サーボモータータイプですから、小さなサイズの仕事には小さいスクリーン版が使えます。スクリーン版は高価なものですから、非常に助かります。それに、スクリーン印刷はスクリーン版にスキージで圧をかけますから伸びが生じやすいです。送り方向の伸びは、単独サーボモーターで版と原反の動きを調整できるので見当が正確に合います。特殊印刷の場合は、お客様はその加工が目当てですから、目もその部分にいきます。ほんの少しずれるだけでクレームに繋がります。オフセット、デジタル印刷、スクリーンのクロス運用を考えた時、マエストロ80SDの選択はベストであったと思います。

本誌 高性能の機能を生かし、スクリーン印刷の仕事も受注することになるのですか。

大洞 スクリーン印刷機を入れましたが、デジタル印刷機も導入しています。当社の事業は、前に申し上げたとおり、フォーム印刷と特殊印刷の2つです。昔から当社を利用いただいているフォーム印刷、そして、スクリーン印刷、デジタル印刷、UVオフセット印刷をクロスしての特殊印刷です。勿論、お客様から依頼があれば、スクリーン印刷単独の仕事も請けますが、基本的には、特殊印刷の一つのラインとして新しい市場を創造することです。そうした眼で見たとき、マエストロ80SDは見当機構、版枠とシリンダーの位相制御による刷り延び補正機



特殊印刷の製品サンプル

能、印圧デジタル制御のスキージ装置など、優れた機能を持ち合わせていますので特殊印刷の力強い味方となります。今回の導入は、新たな提案、新しい商品開発への大きな一歩になると思います。

本誌「チェンジ」精神が社内に満ち溢れていると感じましたが、次なる展開のための情報収集に余念がない。

大洞 社内にはいろいろな設備を備えています。その使い方を知り、できることを知ることで新しい道も見えてくると思います。社員にも展示会などで珍しいものがあったら貰ってくるようにしていますし、情報収集にも心掛けています。その技術と他の技術をクロスすることで新しい提案ができるかも知れません。印刷会社や広告代理店、デザイナーへUVオフセットとデジタル印刷、そしてスクリーン印刷を掛け合わせた提案をこれからも積極的に行っていきたくと思っています。

本誌 スクリーン印刷機以外にはどのような設備がー。

大洞 ハイデルの菊半6色機、同7色機、オンデマンド印刷機、その他、型抜き用トムソンを始め各種の設備を導入していますので、社内一貫生産を行っています。UV+スクリーン+箔押しなどの多工程などの一貫生産は、新たな市場を創造するためのノウハウの蓄積に役立っています。

●新しいパッケージの提案を目指す

本誌 一般的に特殊な技術を持つ会社は社内を秘密にされる。しかし、御社は社内見学を拒まれない



特殊印刷の新たな可能性を探るマエストロ80SD

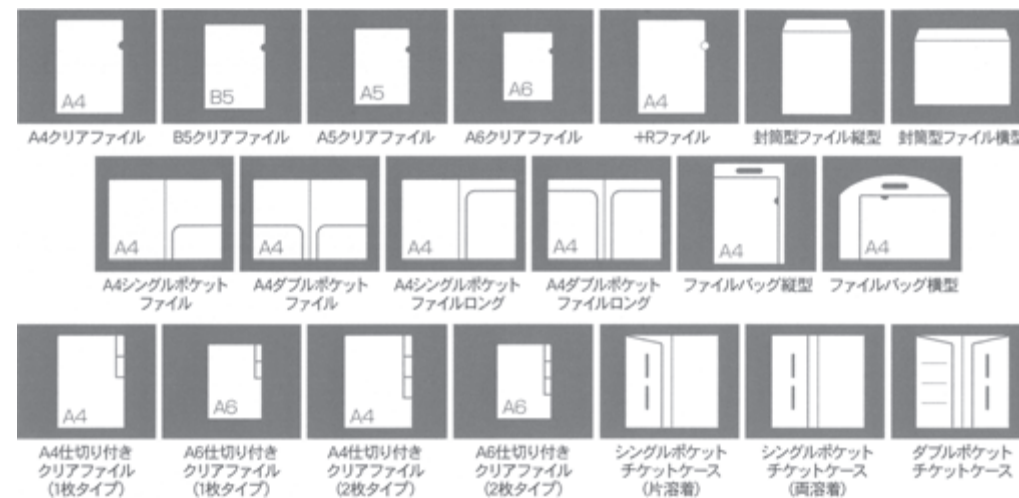
ようで、希望があれば受け入れられている。

大洞 機械は、メーカーに言えば買うことができます。特殊印刷はノウハウが問題です。今まで当社が積み上げてきたノウハウ。つまり、特殊印刷の豊富な技術を持っていますから、社内見学をしていただき、利用できるところは大いに利用していただき、あるいは提携したりして、印刷会社の提案力を増やしていただきたいですね。

難しいことでも喜んでお手伝いさせていただきます。また、こうしたことができないかなという相談もしていただければ、お客様へ他社と違った提案ができると思います。

本誌 そんな中で、新たな取り組みとして考えられているのが、新しいパッケージの提案と聞きましたがい。

大洞 今後、特に力を入れて行きたい分野は、PPやPETなどの透明パッケージの分野です。従来、紙製パッケージが主流でした化粧品のパッケージもスーパーやコンビニなどでの販売が拡大し、消費者が一目で中身の商品がわかるクリアパッケージ・クリアケースの需要が拡大しています。商品への安心感や購買意欲の向上が期待でき、さまざまな分野での利用が増えています。ただ、透明パッケージのUV印刷は少々ノウハウが必要で自社の強みでもあります。また、デジタル、スクリーン、UVオフセットのクロスによる他社の真似のできないものを開発していきたいです。



大洞印刷 クリアファイル活用法あれこれ

UV印刷技術を駆使／用途に合わせ多種多様な製品

大洞印刷(株)がクリアファイル印刷を始めたのは今から10年ほど前になる。この間、数々のUV印刷のノウハウを蓄積、『UV印刷の大洞』の名を高めてきた。特に、UVオフセット印刷によるPP、PETなど化成品への印刷を得意とし、豊富なアイテムを取り揃えている。現在、インターネットでの展開も行ない、さらなる間口拡大を図っている。クリアファイルのあれこれをピックアップし紹介してみる。

■クリアファイルの種類

クリアファイルの形状は、スタンダードなA4からA6サイズ、封筒型サイズやポケットの付いたものなど20種類ある。また、厚さに関しても、一番多く利用されている0.2mm厚から丈夫さが特徴の0.3mm厚まである。

■素材からみた活用方法

□スタンダード：クリアファイル素材として一番多く利用されている0.2mm厚のPP素材。

⇒オリジナルのクリアファイルを制作したいが、何を選べばいいのかわからない。そんな時にお奨め

なのがスタンダードタイプ。クリアファイルを制作するには一番多く利用される素材で価格も手軽。ノベルティグッズから販売品など、幅広い用途で利用できる。

□ピュア：化粧品のパッケージなどに利用されている透明度の高いPP素材。

⇒透明部分を活かしたデザイン・用途ならこの素材が最適。書類を渡す時など、中に入っている書類をはっきり見せたい、PRしたい商品や企業がクリアなイメージのため、素材でもそれを伝えたい時などに利用できる。